

# ふぞく新聞

4月25日(金)

Vol. 1  
(Vol.97)

## 泣くということ、 泣けるということ！！

ふぞく幼稚園の二〇年度がスタートしました。入園式の翌日、多くの子ども達が泣いていました。幼稚園に対して、期待もありましたが、正直不安の方が多いものです。(特に三歳児さんは)もう何年も幼稚園にいるかのように遊んでいる新入園児の姿を見てしまうと、なんで家の子……と思われるかもしれませんが、決して悪いことではないのです。遊んでいる子が良くて、泣いている子が悪いなんて図式は頭から消して欲しいのです。十人十色で子ども達も様々なのです。泣いている子というのは、それだけお母さんの時間が心地良かったのではないのでしょうか？お母さんと離れて泣くことはとても自然な姿です。「もう二度と会えないと思っていたら……」

子ども達にとって、幼稚園生活は「？」だらけなのです。大人の立場から見たら遊べるところだよ」楽しいところだよ」後で迎えるにいくからね」と思っている、もしかしてこのまま置いていかれるの？」という不安がよぎればもう大変です。一大事です。僕たち幼稚園の先生方は、入園式から卒園式まで毎日ずっと泣き続ける子にあったことがありません。そして、泣いている子を見て見ぬふりをして放っておくことなんて決してしません。(場面や状況によっては、意図的に放っておくことはあるかもしれませんが)それどころか、入園式後しばらく頑張りが続いていた子が泣けた時に「あー良かった。やっと泣けたんだね」と安心する位です。泣いている我が子を置いて、走り去るお母さん方は辛いでしょうが、どうぞ長い目で我が子と先生方を見守って欲しいのです。

### 独り言

今年度も『ふぞく新聞』を書かせて頂きます。

『ふぞく新聞』って何？と思われる方、それは、年数は重ねたものの、子ども達の助けを常に借りながら日々保育をしている幼稚園園長が、子ども達と遊び、過ごさせてもらった中で感じたことを思うがままに書いたものです。

当園の方針は『子ども達の遊びを応援する幼稚園』です。その応援方法の一つとして、この『ふぞく新聞』を通して子ども達の気持ち・言い分・心等々を父母の方に伝えていきたいと思っています。勿論これらが全て正しいわけではありません。でも少しほんの少しでもいいので頭の片隅にという願いもあります。柿原勝

# ふぞく新聞

5月23日(金)

Vol. 2

(Vol.98)

## 『育児』は『育自』

ある保護者の方から教えて頂いた言葉です。  
『育児』は辞書にも載っている通り、乳幼児を育てることです。『育自』はどういう意味かというと（これは僕の勝手な解釈ですであしからず）子どもを育てることを通じて自分も育つ（成長する）という意味です。

最近の子育てには、この親が育つという部分が省略（簡素化）されてきている気がするのです。

効率良く、楽に！という発想自体はとても良いと思っています。それによってスムーズになつたものはたくさんあるでしょう。ただ、子育てはそういうものではないような気がするのです。

子どもが困難にぶつかる時、実は親も同じように困難にぶつかって葛藤している事がある保護者の方から聞いて、『育自』の言葉が浮かびました。

子育てに、明確なゴールなんてありません。結論なんてありません。模範解答なんてないのです。だから難しいのです。と同時に面白い（奥深い）のです。

あるお母さんが、お子さんがなかなか幼稚園に馴染めず、離れられず困惑していました。僕は、そのお母さんをとても偉いなあ、素晴らしいなあと思っています。

子どもの困惑と一緒に考えて、葛藤するということは、お母さんが、母親として成長している証拠だからです。

子どもの姿を通じて、お母さんは今まさにその子とのバランスをとろうとしているのです。お母さんの気持ちが重すぎればそのバランスは崩れます。子どもの気持ちを尊重してあげたとしても、お母さんがそのことに納得できていなければ、長続きはしません。バランスをとる作業がまさに『育自』です。

### 独り言

子育てで、お母さん方を苦しめているのは、「子育てを完璧にこなさなければいけない」という世の中の風潮のような気がします。

「人が関わる事で完璧なんて絶対ないのになあ」と思っています。なぜなら人はみんな違うからです。価値観が違うのだから、同じことをしてもみんなに評価されるなんてことは絶対ないのです。

「みんな違うということ」を認め合うことから始めなくてはいいのです。

親子でも違って良いということを確認することが出来る、上段で話しているバランスの取り方に幅が生まれます。ゆとりが生まれてくるのです。  
柿原 勝

# ふぞく新聞

6月6日(金)

Vol. 3  
(Vol.99)

## 『自然な姿』

参観日等で保護者の方が幼稚園に来た時に、子ども達が急に甘えた姿を見せて、お母さんにべったりしたり、泣いたりした姿を見ることがあります。そのような姿を見かけた時、僕は逆に安心するのです。だって、まだ(最高でも)六歳ですからね。

幼稚園でもやはり、(お家と同じ)こんな感じなのかしら・・・」と心配されるお母さん方、そんなことないのです。幼稚園では、とても頑張っているのです。でも、お母さんを目の前にしていつもの姿に戻っただけなのです。

つまり自然な姿に戻っただけなのです。担任の先生方に見てみたら、あら?どうしちゃったの?」「いつもはそんなことないのに・・・」と驚いてしまう程なのですよ。

卒園児に、参観日になると急変する子がいました。いつもは、何でも一生懸命ですが、お母さんやお父さんがいると急に甘えん坊になってしまうのです。

担任としては、いつもと違いすぎるので、ありやうや・・・どうしよう。保育にならないかも。」と焦る気持ちかわかないわけではありません。でも、上段でも述べているように、「(年長さんだとしても)まだ六歳なんだ」という当たり前のところに気付けると可愛いと思えるのです。そう思えると声掛けも接し方も変わるのです。

「この間、あるお母さんの一言に感動しました。その子は、お母さんの姿を見たことで大泣きしてしまったのです。僕がまだ三歳ですもんね」と言うところなんです。泣かれるということとは、私が必要なんだと、逆に嬉しくなります」と答えてくれました。

### 独り言

「ふぞく幼稚園の子ども達は、本当にのびのびとしているなあ」と園外保育の際に思うのです。ふぞくの子ども達に刺激をされて、他の園の子も遊びが広がる光景を見ました。

ルールや約束を守れないのは確かにまずいですが、その基本が出来ていれば、後はある程度はみだしたって良いと思っています。

最近の世の中の傾向は、怪我や事故に對して大人(社会)が過敏になり過ぎていくように思うのです。僕が心配しているのは、『過ぎていく』ということなんです。心配すること大切ですし必要です。でも心配し過ぎるのは問題です。『過ぎたるは及ばざるが如し』です。柿原 勝

# ふぞく新聞

6月27日(金)

Vol. 4  
(Vol.100)

## よく衝突するお友達

三歳児クラスの様子です。入園当初からよく衝突するお友達がいました。第三者の立場（実際は第三者ではないのですが、改めて冷静になった時）から見させてもらうと、「この二人どこか似ているなあ」といった感じです。

似ているから「そ、お互いのことが気になるよ」で、**片付けてない**と言いつつ、最後は押しついたり、叩いたりする時もありました。

三歳児は言葉でうまく気持ちを伝えることが出来ません。ついつい手が出るものなのです。全身で自分の気持ちをアピールしている姿はどこかとても素敵にさえ感じます。（変に気を遣いすぎて疲れている現在の大人達と比べると）そんな衝突を続けていくうちに変化が見られてきました。時々仲良く遊んでいるのです。

ついさっきまで喧嘩していたのに、二人でじやれあつて、とても楽しそうです。帰りの会の絵本なんてそっちのけで **ねえ〇〇** **ねえ△△**と言つてくついついています。

そのきっかけは、些細なことでした。喧嘩している二人が仲直りした時に、**ダブル抱っこ**と言つて二人を同時に抱きかかえてグルグル回したのです。

それを羨ましそうに見ている子が沢山いたので、「じゃあ、みんな一人ずつユラユラするか」と言つて抱きかかえて揺らしました。

一人ずつでもみんな満足して席に着いたのですが、先ほどの二人のうちの一人だけは、

**ねえ先生、〇〇君と一緒にして**と僕に小さな声で言っていました。

どうか、もう一度二人でして欲しかったのかあ、さっきまで喧嘩していたのに・・・と心の中で嬉しく思うのでした。

### 独り言

上記の話は珍しい例では決してありません。多くの子が通る通り道です。よく衝突するお友達というのは、実は後々仲良しになつていくことがしばしばあります。

勿論、この二人、仲良く遊ぶ時もありますが、それ以上に衝突も繰り返します。『喧嘩するほど仲が良い』というのはまさにこのような二人をいうのでしょうか。

喧嘩すると、時には傷も出来てしまいます。幼稚園内で起きた喧嘩による傷は幼稚園の責任です。本当に申し訳なく思うのです。と同時に、お母さん方にお伝えします。傷を防ぐことだけに全力を注ぐ幼稚園にはなりたくないのです。ご理解下さい。

園長 柿原 勝

# 本部席から見た運動会

## ふぞく新聞

7月18日(金)

Vol. 5  
(Vol.101)

二〇年度のふぞく幼稚園の運動会が無事終了しました。

自分の園の運動会を自画自賛するのはどうかとも思いましたが、『良いものは良い』と言いたかったので改めて、**本当に素晴らしい運動会でした**」

全員参加出来たこと、気温も高く、天候も晴れだったこと、会場の声援・拍手の温かかったこと、会場の準備や競技の用意を率先して下さったお父さん方の協力体制、それぞれの係に分かれてお手伝いをして下さったお母さん方。

そしてふぞくの伝統である、全家庭での片付け等々、感謝の気持ちでいっぱいです。

そして何より練習の姿も含めて、子ども達・先生達の頑張りに嬉しく思いました。

色々なことが見えた、感じた運動会でした。

入場の際、子ども達が会場みんなに手を振っている姿のかわいらしいこと。

担任の時は、心のどこかで、『おいおい、手を振ってる場合じゃないって、前を見ないと列が乱れちゃう（止まっちゃう）だろう！』と思ったものです。

かけつこの時も、ゴールまで走るその姿にとっても嬉しい気持ちになりました。応援している方達の声援もよく聞こえます。

年中少のお遊戯のかわいいこと、年長のヨサコイの格好良いこと。

リレーの時の子ども達の一生懸命な表情がとても印象的でした。今まで見えてなかったんだなあ……と反省しました。

子ども達のことをよく見る（子ども達の声をよく聞く）ことの大切さを子ども達から教わって、今があります。でも、まだまだだったんだと痛感しました。

運動会の後も、園庭でリレーをして遊んでいる子がたくさんいます。運動会の後に、クラス対抗障害物リレー（先生・父母の競技）の真似をして、バットでグルグル回って遊んでいる子もいました。

### 独り言

運動会という行事は確かに大きな遊びと、かけ離れているように感じるかもしれませんが、中身の一つ一つは、やはり遊びなのです。

遊びから生まれて形になったものが行事であるべきだと僕は常々思っています。そういう意味でねらいも達成出来たと嬉しく思っています。柿原 勝

# ふぞく新聞

8月29日(金)

Vol. 6  
(Vol.102)

## 二つのお泊り会

一学期の最終日は、ふぞく幼稚園の年長さんを対象としたお泊り会の日でした。

その中でドラマがありました。数日前まで不安が先行していた園児が、一番最初に、しかも笑顔で登園して来たのです。

今年も、多くの子が不安がっていました。そんな時我々保育者は、色々と接し方(声掛け)を工夫します。結果はともかく、僕はその工夫している時が一番『保育者』なんじゃないかと思っています。教える・示す』ばかりではなく、その氣にさせる・乗せる』というのが効果的です。

担任の先生は、見事子ども達をその氣にさせたようです。帰る時の子ども達の表情がどこか誇らしげに感じました。

今年から、新たに企画した行事があります。それが、『卒園児のお泊り会』です。

ふぞく幼稚園は卒園後も見守る幼稚園』でありたいと思っています。

幼稚園に在園している間だけ、問題なければそれで良いなんて思っていない。

卒園後、その子ども達がどうなっているのか、どう成長しているのか、先を見据えて保育をしていくことが、幼児教育に携わる者がもつべき姿勢だと思っています。

運動会の様子を見に行っても、ほんの一部しか分かりません。実際に一緒に遊んだり、話して感じるがありました。

子ども達は、確実に、着実に成長していました。二年生の先生、質問!」や勝先生の意見に賛成の人、手を挙げて!」といった声には面白いなあ」と思っただけでなく、感動しました。

### 独り言

子ども達に、色々なことを質問しました。

「小学校の勉強は楽しいか?」「幼稚園の時に楽しかったことは?」等々。小学校の勉強は今のは楽しかったです。

小学校の先生をしている保護者に聞くと、「二年生の学習内容が今後の学習の土台となるし、二年生から覚えることが多くなり、難しくなる」とのことでした。

小学校の先生には『学ぶ意味』と『学ぶ楽しさ』を必ず伝えて欲しいと生意気にも思っています。

幼稚園時代は日々そのものが楽しかったようで、とても嬉しく思いました。

これからもういう幼稚園でいつづけたいと思いました。柿原 勝

# ふぞく新聞

9月12日(金)

Vol. 7  
(Vol.103)

## 個性豊かな人を育てることと ルールを守ること

どうもこのあたりがあやふやな感じがします。個性豊かな人を育てる為には、ルールを無視してもよいと解釈している人がいるようです。ルールを押し付けると個性が消えてしまうと考える人がいるようです。

それと、ルール＝集団にとらえている人もいます。ようですが、それも違うと思います。

集団があつてその集団が機能する為にルールがあるのです。だからルールありきな姿勢は僕も反対です。集団を機能させる為にはルールはやはり必要です。そのルールを守れないとしたら、守れるように教えていくしかないのです。教え方が問われているのです。

教え方、声掛けの仕方が分かりやすく、ねらいがしっかりしていると良いと思うのです。

ルールは堅苦しいものと解釈している若者が多いように思います。ルールがない世の中の方が恐ろしいことも知らないで……。

ルールがあるから社会で人は生活できるのです。個性豊かな人がルールを守れないわけでは決してありません。

個性豊かな人＝変わり者みたないレッテルを貼って納得させている気がします。

個性豊かとは自分の考えを持っている人だと思います。又、色々な事に興味・関心・

疑問を持つ人だと思います。なんで？」どうして？」をほっとかず、自分なりに考えて自分なりの回答を出す人だと思います。

そんな風に子ども達に示していきたいと思っ

ています。みんなが○」といったから何も考えず○」と思うのではなく、僕はこれこれの理由で×だと思う」と言える人間です。その為には……。

### 独り言

大人の価値観を変に押し付けてしまつてはいけないのです。

絵本や紙芝居を子ども達に読んだ時に「面白くない」と言う子がいました。「え、何生氣！」と思った方は要注意です。僕はそんな意見を言える子、とっても好きです。逆に良いことだと思っています。「面白くない」と言えたその場の雰囲気も良かったのだと自分を誉めます。

小さい時からの積み重ねです。いきなり個性豊かな人間が出来るわけではないのです。「みんなと同じ意見だから安心」なんて全然面白くも何ともないのです。みんなどこか違うのです。それを認め合える世の中が良いと思うのです。柿原 勝

# ふぞく新聞

10月3日(金)

Vol. 8  
(Vol.104)

## 遊びをつくる子ども達

今の子ども達は遊べない』という声を聞いたりしますが、子ども達と一緒に遊んでいるとそうは思いません。ちゃんと、自分達で遊びをつくり出せることを知りました。

当園には、道路標識にとっても興味を持っている子が数名います。そこで、ある先生が子ども達に、紙で道路標識を作ってくれたのです。

鬼「っ」をして遊んでいると、その小さな道路標識を持った子が**入れて!**とやって来ました。

その子を追いかけて捕まえようとした時です。

石に曲がる『標識を僕に見せて、**右にしかいけ**

**ません!**』と鬼の僕に指示を出すのです。それ

は困った』と言って右に曲がっていくと他の子も

落石注意』や 正まれ』の標識を使って、鬼の僕

が困るのを楽しんでいるのです。凄いでしょ!

子ども達は、遊びの天才なのです。上段の話のように、教えていなくても、自分でイメージして遊びを広げたり、深めたりしているのです。

標識だけではありません。砂場の砂をジュースに見立てて、飲ませてくれます。飲んだ瞬間に魔法をかける真似をして **実は毒でした**』と言って楽しんだりもしています。

未就園児教室に参加して下さったお友達が、滑り台やブランコではなく、砂場の周りの杭の上を落ちないように歩いているのを見て、なるほど、これも面白い』と思いました。

確かにテレビゲームは面白いです。何故なら子ども達が楽しめるように分かりやすい内容に工夫されているのです。でも、テレビゲームだけでは心は育ちません。人と関わって遊ぶことをおススメします。

### 独り言

先日、北海道教育委員会主催・北海道教育庁釧路教育局主管で、『新教育課程説明会』がありました。

簡単に言うと、全国の幼稚園が規範としている物（Ⅱ教育要領）が若干変更になるので、それを幼稚園業界の方に知らせる場です。

今回強調された変更箇所はいくつかありましたが、幼稚園教育の大切さを一番端的に表していたのが、「幼稚園教育によって、義務教育及びその後の教育の基礎が培われる」というところです。

小学校教育の為だけではなく、その後の長い先のことも見据えていくことが幼稚園には求められているのです。まさに土台作りなのです。

柿原 勝

# ふぞく新聞

10月17日(金)

Vol. 9  
(Vol.105)

## 後伸びする子どもへ

十月上旬に、北海道の道東地区の私立幼稚園が網走に集まって勉強を行う、北海道私立幼稚園連合会の道東ブロック大会が開催されました。今回の北見支部は新たな取り組みを色々と取り入れているので、二年後の釧路大会の参考にもなると思い参加してきました。

今回の大会のサブテーマ「あそび、生活を通して、後伸びする子どもに」に個人的に引かれていました。

昨年度の大会でも、「遊びは、学び」ということを分かりやすく説明してくれたのも、北見のある幼稚園でした。

記念講演を行ったのは、京都の嵯峨幼稚園の園長先生でした。四十代位ですが、全日本の私立幼稚園の大切な役割を担っている方でした。

さて、その方の話です。保護者の方に、目に見えない育ち、後伸びする力」を分かりやすく説明できなければ、保護者の方が不安になるのは当たり前だということです。

どうして字を書いたり、読んだりすることとを後回しにしているのか」を伝えないと、小学校の一年生で困っていたら、え、大丈夫?」となると言うのです。これは、ふぞく幼稚園にも当てはまる問題です。

その方の回答は今までふぞく新聞で述べてきた事と同じでした。後でやっても取り返せることは、後で良い。幼児期に今すべき大切なことは、人と関わって色々な考え方や感じ方があることを学ぶ方が大切だ」というものでした。奈良の法隆寺が崩れなのは土台がしっかりしているからで、幼児期はまさに土台作りだという内容でした。(佐々木正美さんも述べています)

### 独り言

講師の方は、幼児期が基礎(土台)ならば、小学校は家の柱で、中学校は壁や屋根で、高校は床で、大学や大学院は家具のようなものだと話して下さいました。家具はいつでも買い替えることが出来ます。床だって、大変ですが、まだリフォームがききます。屋根や壁もまだ何とかなるとは思うが、少しずつ後から行うには大変なのが分かります。更に柱は大改造です。でも、まだ何とかあります。問題は、基礎の部分です。家を建ててから、やっぱり基礎をやりなおすのは、どれほど手間がかかることかは、想像がつきますよね。後伸びとは、基礎をしっかりと築くことを意味します。柿原 勝

# ふぞく新聞

11月7日(金)

Vol. 10  
(Vol.106)

## 子ども達は真似をする

集団生活の場がとても大切なのは、何となく多くの方が感じていることだと思います。でも、もつと深く掘り下げてみたいと思います。

家にいて、お母さんやお父さんからのみの声掛けでは、なかなか育ちにくい部分があるのです。大人に言われたら素直に「うん」と言えないけれど、友達から言われたら「分かった」と言えるような感じですよ。

同年齢や近い年齢の存在から自然と刺激を受けたりする方がスムーズに受け入れられる（＝育ちに繋がる）のが子ども達なのです。色々な個性豊かな子ども達が集まると、その集団は更に魅力を増す可能性を持っているのです。お互いに刺激し合う関係になれば、その集団は質の良い集団となるのです。

では、上段の質の良い集団とするためには、先生がその個性を認めて、誉めていくことが第一歩となるのです。子ども達は、本当に大人の声掛けをよく聞いているのです。そして、聞いて真似をするのです。

サッカーをしていました。年長さんは本当にとても上手になりました。そんな年長さんに誘われてサッカーをしている時のことです。この時期になると、今までしていなかったお友達も少しまざってきます。そのお友達はまだルールを良く理解していませんから、スローイン等はよく分かっています。そんな場面で、とても分かりやすく、そして丁寧に教えている年長さんがいました。そして、年中さんの子がボールを蹴った時に何気なく出た言葉、〇〇、上手！」を聞いた時は嬉しかったです。意識して声を掛けてきたことがちゃんと伝わっていたのです。

### 独り言

現在、釧路短期大学で『保育方法論』という講義をさせてもらっています。今まで子ども達から教わった大切な気持ちや言葉や思いを、将来幼児教育に携わるであろう学生に伝えることも僕の出ること、すべきことだと思っています。

その学生達に伝えたメッセージ（佐々木正美さんの言葉）中でとても奥深いのが、「教育は口や言葉でするのではなく、ただ手本をみせておくだけでよい」というものです。

子ども達はあの素晴らしい目で、大人達を良く見て、そして真似るのです。子ども達は良く聞こえる耳で、大人達の声をしっかりと聴き、そして真似るので、柿原 勝

# ふぞく新聞

12月4日(木)

Vol. 11  
(Vol.107)

## 変わるのは先生！！

最近、特別支援教育という言葉をよく耳にするようになりました。とても良いことなのに、どうも本質のところが伝わっていない気がしているので、改めて僕自身が考えていることを述べさせて頂きたいと思います。

まず、障がい児教育の別名では決してないことを改めて強調したいと思います。

昨年度も『ふぞく新聞』で特別支援教育について書かせてもらいましたが、今回は、具体的に例を挙げて説明していきたいと思います。

三〇名学級の保育や授業を想像して下さい。

先生が子ども達に説明した際、三分の二、つまり二〇名が理解出来たとしたら、その説明はどうだったのでしょうか？上手な説明といえるのでしょうか？

さて、上段の続きです。二〇名の子ども達が先生の説明で理解出来ているなら、まあまあ分かりやすい内容だったと思います。

残りの一〇名の内、五名は二〇名の真似をして説明を理解出来ていなくても何とかなるかもしれません。更に残りの五名の内三名は先生が一声掛けて友達に助けをもらうように頼めばなんとかなるかもしれません。

ん。最後の二名は先生が直接アドバイスすれば、なんとかなるかもしれません。

つまり、三分の二が理解出来る説明は、なんとかなると言えばなんとかなるので、でも、それを先生が六分の五が理解出来る説明をしたらどうでしょう？

二十五名が理解して、残りの三名は真似をして、残りの一名は友達が助け、残りの一名は先生がアドバイスする。そんな説明を常日頃から先生がするのです。

### まとめ

さて、結論は何かと言うと、六分の五が理解できる説明というのは、図や絵を用意したり、子ども達がイメージしやすいような工夫が必要なわけですね。その工夫を先生が常日頃から行っていくことこそ、特別支援教育の本質だと思っています。

三分の二の説明は悪くはないですが、そこで満足している説明ではないのです。

変わるのは、子ども達ではなく、やはり先生だと思ふのです。ここがスタートです。

授業や保育がまず基本です。どうも、最近の先生方は、基本以外の仕事が増えているように思ふのです。そういう意味でも原点にかえることが大切だと思ふのです。柿原 勝

# ふぞく新聞

1月22日(木)

Vol. 12  
(Vol.108)

## 子育て支援の真髄

「ここ数年、文部科学省より、幼稚園でも『子育て支援センター』の役割を担うように!」ということが言われています。

子育てがとて難しくなった現在の日本社会というのは感じますが、果たして子育て支援とは、具体的に何をすれば良いのでしょうか?

何故、子育て支援を幼稚園が担わなくていけないのかを改めて考えてみました。

ちなみに、当園も平成十五年から、地域子育て支援事業として未就園児教室(Ⅱさくらんぼクラブ)を行っています。

まず、子育てで大変なお母さんを物理的に助けようということで、子ども達を預かり、お母さん方に休息の時間を持ってもらおうという案が出てきました。間違いではないですが……。

上段の続きです。物理的にお母さんを休ませてあげることは、時には必要でしょう。

反対はしませんが、これでは、幼稚園や保育園の仕事が増えただけで、逆に、保育者がパシクしてしまうのでは?と疑問も残ります。お金を払って、免許を持っているプロに預ければそれでいい」という考えだけでは、長くは続かないと思うのです。

どうして、幼稚園や保育園が子育て支援を担うのかというと、それは現場で多くの子ども達を見てきた先生は、子ども達の良いとこ、素敵などこ、喜ぶポイントを自然と(子ども達から)教わってきたからなのです。

そんな子ども達の良いところ、素敵な面を保護者の方に改めて伝えることで、子育てって、大変な面だけじゃないんだ」と再認識してもらうことが重要なのです。

### 独り言

子ども達を取り巻く環境は、大きく変わっていきました。その結果、その負担がお母さんに向いてしまった事実は否めな

特に、一生懸命なお母さんほど、悩んで、苦しんでいるという気がします。この間、ある本を読んでいて「これ大切な感覚だなあ」と思ったのは、『子どもは、育てる』のではなく、「育つ」のです。その育つ力を信じて、見守ってあげる、困っている時に支えてあげれば『いい』という内容でした。

一生懸命な方は、育児書の全てをクリアしようと

するのだそうです。出来なければ「これは無理だからしない」位の感じが良いそうですよ。

柿原 勝

# ふぞく新聞

2月6日(金)

Vol. 13  
(Vol.109)

## そり滑いを見ていて

ふぞく幼稚園には自慢のそり滑りの場所が二つもあります。

一つは、以前からある学園グラウンドの大きな坂で、大人も満足出来るほどのそり滑り場所です。子ども達は **先生、グラウンド行こう！**と言ってそりを引きずりながらそこまで歩いて行くのです。ただ、この学園グラウンドの坂には少々問題点もあって、年少さんにとってはそこまで行くのがとても大変なのです。やっとなことで着いても数回滑ったら『お片付け』になってしまい、楽しめない子がいたのです。又、日なたにあるので、比較的早い段階でとけてしまうのです。そこでもう一つを今年から用意しました。それが園庭内にある坂です。これは近いし、すぐにはとけず、お昼の後もみんなが楽しめるのです。

さて、この園庭のそり滑りを子ども達と一緒に楽しみながら、よく観察してみると興味深い姿がありました。

あるお友達二人が何度か滑った後、二人で紐を持ちながらくっついて滑っているのです。二人で滑ったらスピードが速くなるかどうか試しているのです。(それではスピードが出なくなるのは分かっていますが、こんなそんなアドバイスは無意味です。何故なら、この試している姿こそ子ども達にとって必要なことそのもので、科学だからです) その後、**ダメだなあ・・・**と言って今度は、そりを2台重ねて滑ってみたり、後ろ向きにしてみたりと色々と試みていました。このような姿は大人から見たら『無駄』のように感じるかもしれませんが決して無駄ではないのです。自分で考え、試し、気づき、実感するという流れとなるからです。

### 独り言

雪が降ると、子ども達は本当にとっても嬉しそうです。そして、雪が降ると必ず子ども達は**「先生、外行こう！」**と言って登園後すぐに外に行きます。

そんな雪が降った後は、子ども達にとって、科学の絶好の場となります。雪質が違ったり遊びも変わります。ベタベタ雪の時は、雪だるま作り、雪合戦。サラサラ雪の時はそり滑りを楽しんでいます。でもこの違いにすぐに気付くわけではないのです。**「あれ？」**言いながら何度もサラサラ雪を丸めようとしている子ども達をよく見ます。この**「あれ？」**が大切なのです。そのうち自分で分かった時が実感出来た、分かった時なのです。柿原 勝

# ふぞく新聞

2月27日(金)

Vol. 14  
(Vol.110)

## 『待つ保育』とは？

『待つ保育』が現在の保育の主流です。数年前にNHKの朝の連続ドラマでもそのような内容が取り上げられました。

この『待つ保育』の根本には、以前のふぞく新聞の独り言で書かせてもらった子どもは育てるのではなく、育つ」という考えがあります。

子どもの育つ力を信じているからこそ、何でもかんでも教えてしまうのではなく、その子の主体性を大切にしていくというものです。

但し、この言葉の本当の意味をはき違えている感じがするのです。特に、養成校の学生や新人の先生にその傾向が見られます。

この間、この業界では名の通った講師の先生が釧路に実技演習に来て下さった時色々とお話をさせて頂きました。その方も同じことを……。

その方の幼稚園での話です。ある園児数名が水飲み場で蛇口を全開にして遊んでいた。子ども達は、確かにその水の流れ等を楽しんでいたそうです。近くには先生がいたのに、その先生はその様子を見守っていたというのです。

そこへ、その講師の先生が「エコだから」と言って蛇口を止めました。子ども達が降園後、見守っていた先生に「どうして止めなかったのか？」を確認したところ堂々と子ども達はとても楽しんでいました。だから見守っていました。待つ保育です」というようなことを言ったそうです。

その講師の方も僕も「そんなの待つ保育じゃない」という意見です。なぜなら、それなら何でもありになってしまうからです。待つ保育は楽しければ何でもいいというようなそんな安易なものではないのです。

### まとめ

『待つ保育』というとても格好良く聞こえますが、この保育には、保育者の質の高さが問われています。

子ども達の主体性をどこまで認め、どこから注意するかは、子ども達をよく見ていないと、子ども達の声をよく聞いていないと出来なからです。

同時に、『待つ保育』というのは、ただ見守っていれば良いという意味ではないのです。保育者が事前にすべきこと（出来ること）をした上で、子ども達の活動を見守るという意味だからです。

「人事を尽くして天命を待つ」というと大袈裟かもしれませんがその感覚に近いのです。柿原 勝